

## 万葉集の背山・妹山

—吉野の妹山・背山をめぐって—

### はじめに

万葉集には背山・妹山を詠んだ歌が十五首収められている。いずれも紀伊国の背山・妹山（和歌山県伊都郡かつらぎ町）を詠んだ歌と考えられる。ところがこの十五首の中の一首については、紀伊国の背山・妹山にあらず、という主張を真正面から展開した重厚な論文（稲岡耕二「大名持神社と人麻呂歌集—人麻呂の工房を探る（其の三）—」〔『萬葉』第一八八号、萬葉学会、二〇〇四年六月、32～45頁。以下稲岡論文と呼ぶ〕が発表された。それは柿本朝臣人麻呂歌集所出の歌で、巻七の「羈旅にして作る」の項に配置された次の歌（以下、当該歌と呼ぶ）である。

大穴道少御神の作らしし妹勢能山を見らくしよ  
しも

（⑦一二四七）

稲岡論文は、この当該歌に詠まれた「妹勢能山」とは、吉野の妹山・背山であると論じた。

これに対して前稿（「妹勢能山詠の諸問題」〔『萬葉集研究』第27集、塙書房、二〇〇五年六月、363～392頁。以下村瀬前稿と呼ぶ〕において、いくつかの理由を付して、当該歌の「妹勢能山」を吉野のそれと認定することには慎重でありたいと述べた。

村瀬前稿では論文題目が示すように、「妹勢能山詠」の問題を多岐にわたって論じた。本稿では当該歌の「妹勢能山」が吉野のそれであるか否かという問題に執して、あらためて吉野の妹山・背山の事態を観察し、もって、当該歌の「妹勢能山」は吉野のそれであると考えがたいという前稿の主張を再確認する。

村瀬 憲 夫

## 一 問題点の確認

すでに村瀬前稿で述べたことと重なるが、当該歌の「妹勢能山」の所在を確認する必要がなぜあるのか、その問題点のありかをまず述べておきたい。

まず万葉集中の背山・妹山を詠んだ歌、十五首を列挙すると次のようになる。作歌年代の記されたもの乃至は推定できるものをほぼ年代順に並べ、その後には作歌年代不詳のものを巻毎の配列順に並べ、通し番号を付した。

1 これやこの大和にしては我が恋ふる紀路きぢにありといふ名に負ふ勢能山

(①三五、阿閑皇女、持統四年六九〇)

丹比真人たちひのまひとかさまろ笠麻呂、紀伊国に往き、勢能山を越

ゆる時に作る歌一首

2 たくひれの懸けまく欲ほしき妹の名をこの勢能山にかけばいかにあらむ

(③二八五、丹比笠麻呂、持統・文武朝)

春日藏首老、即ち和こたふる歌一首

3 宜よろしなへ我が背の君が負ひ来にしこの勢能山を妹とは呼よばじ

(③二八六、春日藏老、持統・文武朝)

大宝元年辛丑の冬の十月に、太上天皇おほきすめらみこと・大行天皇さきのすめらみこと、紀伊国に幸す時の歌十二首(うちの一首)

4 勢能山に黄葉もみちつね常敷く神岡かみをかの山の黄葉は今日か散るらむ

(⑨一六七六、作者未詳、大宝元年七〇二)

小田事をだのつかふの勢能山の歌一首

5 真木まきの葉のしなふ勢能山しのはずて我が越え行けば木この葉知りけむ

(③二九一、小田事、文武・元明朝)

神亀元年甲子の冬の十月に、紀伊国いづまに幸す時に、從駕の人に贈らむために娘子あなごに詠うたへられ  
て笠朝臣金村の作る歌一首併せて短歌(うちの第一短歌)

6 後れ居て恋ひつつあらずは紀伊きの国の妹背乃山に

あらましものを

(④五四四、笠金村、神龜元年<sub>七二四</sub>)

7 麻衣あさしろも着ればなつかし紀伊の国の妹背之山に麻蔀まく我妹わがも

(⑦一一九五、藤原卿、神龜元年<sub>七二四</sub>〔推定〕)

8 紀伊道きいぢにこそ妹山ありといへ玉くしげふたかみやま二上山も妹こそありけれ

(⑦一〇九八、作者未詳)

9 勢能山せのやまに直ただに向へる妹之山いもこと許せやも打橋渡す

(⑦一一九三、作者未詳)

10 人にあらば母まなごが愛子まなごそあさもよし紀の川の辺への妹与背之山

(⑦一二〇九、作者未詳)

11 我妹子わがもこに我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹与勢能山

(⑦一二二〇、作者未詳)

12 妹に恋ひ我が越え行けば勢能山の妹に恋ひずであるがともしさ

(⑦一二〇八、作者未詳)

13 妹があたり今そ我が行く目のみだに我に見えこそ言問ことはずとも

(⑦一二二一、作者未詳)

14 大穴道おほあなみち少御神すくなみかみの作らしし妹勢能山を見らくしよしも

(⑦一二四七、柿本朝臣人麻呂歌集)

15 紀伊の国の 浜あはびたまに寄るといふ 鮑玉ひり拾はむと言ひて 妹乃山 勢能山 越えて 行きし君 いつ来まさむと 玉梓たまほこの 道に出で立ち 夕占ゆふうらを 我が問ひしかば……

(⑬三三二八、作者未詳)

村瀬前稿で詳述したように、1から7までは、作歌年代のほぼ認定できるものをその年代順に並べたもので、その歌の様相を観察すると、歌に妹山の名が初めて見えるのは6の歌であることがわかる。あわせて2と3の歌の、背山の名称替えをめぐっての二人のやり取りの内容を考慮すると、妹山の出現過程は次のように推すことができる。すなわち、もともと存在したのは「セノヤマ」(『日本書紀』大化二年〔六四六〕正月一日条に「兄山」と記されている)であった。その「セ

ノヤマ」の「セ」に「背」の連想が及び、さらにその「背」との連想で「妹」が浮上し、その先に「妹山」の出現をみたものと考えられる（犬養孝「妹と背の山考―旅ごころ―」『萬葉の風土』〔続〕、塙書房、一九七二年一月、167～178頁。初出は一九六〇年）。

以上によって、歌に妹山が出現してくるのは万葉集第三期以降であると見通すことができる。ところがこうした時間軸に沿って見た時、問題の残る歌が一首存在する。それが本稿で考察の対象とする、14の柿本人麻呂歌集所出の一二四七番歌である。人麻呂歌集所出の歌が天武・持統朝初期の作であるとするならば、そのような古い時期に詠まれた当該歌に、「妹山」の存在が認められるのは不審である。当該歌を特に検討する所以はここにある。

この問題への解答は五つほど用意できよう。すなわち、①上述の時間軸を否定するか、②当該歌の「妹勢能山」を他の一四首（紀伊国の山と考えられる）とは別の土地の山であると考えるか、③一五首とも紀伊国の同じ山を詠んでいるが、当時の膨大な時間と空間の広がりを考慮すると、歌と歌が互いに没交渉のままに詠まれた可能性もあると考えるか、④当該歌の作歌時

期を万葉集第三期以降まで下げるか、⑤柿本人麻呂歌集歌の一筋の縄では括りきれない、多様な実態を考慮するかであろう。

前述の稲岡論文の解答は、②すなわち、当該歌は他の一四首とは異なる土地の山、すなわち吉野の妹山・背山であるというものであった。当該歌の「妹勢能山」が、紀伊国のそれではなく、吉野のそれであるならば、上述の紀伊国の背山・妹山詠の時間軸から外れても何ら問題はないといえよう。

ちなみに村瀬前稿は⑤もしくは③の可能性を探った。万葉集編纂論の一環として述べているのでご参照を乞いたい。

## 二 吉野の妹山・背山

では本稿の主題に入って、当該歌の「妹勢能山」が吉野のそれであると認定できるのか否かの検討をする。

稲岡論文が吉野説を主張するに際して、有力な拠り所としたのが、和田萃「倭成す大物主神」（『大美和』第一〇五号、大神神社、二〇〇三年七月、49～58頁）であった。和田論文は三輪山（大和）の大物主神と、

出雲の大国主神（大己貴神）との関連についての考察を展開した論である。その中で「出雲国造神賀詞」の次の記述に注目した。

すなはち大なもちの命の申したまはく、『皇御孫の命の静まりまさむ大倭の国』と申して、己命の和魂を八咫の鏡に取り託けて、倭の大物主くしみかたまの命と名を稱へて、大御和の神なびに坐せ、己命の御子あぢすき高ひこねの命の御魂を、葛木の鴨の神なびに坐せ、事代主の命の御魂をうなてに坐せ、かやなるみの命の御魂を飛鳥の神なびに坐せて、皇孫の命の近き守神と貢り置きて、八百丹杵築の宮に静まりましたき。

和田論文は傍線部について「三輪山の大物主神とは、出雲の大己貴神の和魂を八咫鏡に取り託けたものである」という主張を述べたものであると解して、そこに「出雲の信仰が畿内、特に大和に強く及んだことがあった」ことを読み、そのひとつの具体的な事象として、吉野の妹山の麓にある「大名持神社」（大和国吉野郡、祭神は出雲の大己貴神〔大国主神〕）の存在を指摘した。この「大名持神社」は、神名帳に「吉野郡十座」のひとつとして

大名持神社〔名神大。月次新嘗〕

〔延喜式〕卷第九〔神祇〕〔神名〕

と記された、いわゆる式内社である。また清和天皇貞観元年（八五九）正月廿七日に行われた、諸国の神々への進階・新叙の記述の中に次のように見え、大和国大己貴神は大神大物主神よりも社階が高かったことがわかる。

廿七日甲申。京畿七道諸神進階及新叙。惣二百六十七社。奉授……大和国従一位大己貴神正一位。……従二位勳二等大神大物主神。従二位勳三等大和国魂神。正三位勳六等石上神。正三位高鴨神並従一位。……

〔日本三代実録〕〔卷二〕清和天皇貞観元年正月廿七日条

そして和田論文は種々の根拠（和田論文を直接参照されたい）を付して、「出雲の大名持神が大和に勧請されたのは斉明朝の時代ではなかったか」と指摘し、また「斉明天皇の時代に吉野宮が造営され、後の持統天皇は何度も吉野宮へ行幸されましたが、大名持神社はその行幸ルート上にあたります」とも述べている。

稲岡論文は、以上の和田論文の指摘をも踏まえつつ、

当該歌は「大和国吉野郡の大名持神社の社殿背後に見える妹山と、吉野川をはさんで対岸の背山を詠んだものであった」と結論づけたのであった。

さて吉野の大名持神社が、古い歴史と高い格式を有する神社であることは確認できた。では神社の背後にある山はなぜ「妹山」と呼ばれるのか、そしてそのように呼ばれようになるのは、いつごろのことであるのか。<sup>(3)</sup>天武・持統朝初期にはすでにそう呼ばれていたのであろうか。

妹山は現在「妹山樹叢」と呼ばれ、「全山が特有の林相を示した原始林」であり、「昭和三年三月、天然記念物として国の指定を受けた」（『吉野町史』〔下巻〕、吉野町、一九七二年一月）という。これは大名持神社のいわば神体山として、神社の背後の山に斧鉞を入れなかつたことによるのである（参照、桐井雅行著『新吉野紀行―吉野路七十二景―』偕成社、一九九六年六月）。このように今、妹山と呼ばれる山が、大名持神社の信仰とともに手篤く守られてきた山であることは推定できるが、しかし「妹山」という名称の由来は確認できない。

明和九年（一七七二）年三月に吉野の地を訪ねた本

居宣長は『菅笠日記』に次のように記している。

妹背山はいづれぞととへば、河上のかたにながれをへだてて、あひむかひてまぢかく見ゆる山を、東なるは妹山、にしなるは背山とおしふ。されどもことにこの名をおへる山は、きの国にありてうたがひもなきを、かの「中におつる吉野川」に思ひおぼれて必ずことさだめしは、世のすぎものしわざなるべし。されど

妹背山なき名もよしや吉野川よにながれてはそれとこそ見ぬ

吉野の妹背山は、「世のすぎもの」が古今集の歌に「思ひおぼれて」、後世に名付けた山の名に過ぎないと断じている。

一方、桜井満「吉野の風土―神仙境前後―」（桜井満・岩下均編『吉野の祭りと伝承』桜楓社、一九九〇年四月、7―26頁）は、「妹山」は「忌山」の転訛だとみて、次のように述べる。

芋峠から千股ちまたに下り、上市から吉野川沿いに東へ一キロほど上ると、吉野町河原屋の妹山に『延喜式』内の大名持神社が鎮座する。イモ峠の名は瘡も神の侵入を防ぐ国境の峠とする説もあるが、あ

るいは吉野の神なびの山というべきイモ山に呼応するのかも知れない。「妹山」は「忌山」の転訛とみてよく、聖地み吉野に入る「忌峠」だったかと思われるのである。

大名持神社は清和天皇貞観元年（八五九）正月の京畿七道諸神叙位のおりに正一位になっている。大和国で正一位に叙されたのは大己貴神だけである。ちなみに吉野郡では金峯神社が正三位、丹生川上神社は従三位、吉野水分神社や吉野山口神社は正五位下にそれぞれ叙されている。吉野郡内はもとより大和国第一の神階である。柿本人麻呂歌集の歌に、

大汝少御神の作らしし 妹背の山を見らくし  
よしも （巻七の二二四七）

とうたわれているように、早くから国土経営の神としての信仰が篤かったにちがいない。なお、「妹背の山」は吉野川下流の紀の川沿いの「紀の国の妹背の山」が詠まれているが、この歌は「大汝少御神」と結びついており、吉野とみてよかるう。

このように桜井論文は、忌山の転訛した妹山（吉

野）が、大名持神社と関連づけて詠まれたのが当該歌であったと見るのである（なお、桜井論文が柿本人麻呂歌集の作歌年代をどの時期に置いているのかは不明である）。

また吉野の大名持神社の地を中心として展開する「大汝まいり」の民俗について調査・考察をした、菊地義裕「大汝参りと大名持神社の信仰」（桜井満・岩下均編『吉野の祭りと伝承』〔前掲〕、99～112頁）は次のように述べる。

大名持神社には、シオブチの存在と相俟って、水とかかわりの深い農耕神的性格が看取されるのであり、吉野の地主神的性格をもつ神として信仰されてきたのであろう。

大名持神社のオホナモチは、上代の文献に散見するオホナムチ・オホアナムチの神であり、スクナビコナとの国作りの伝承が名高い。『万葉集』にも、「大汝少彦名」おほなむちすくなひこな（三例）、「大汝少御神」すくなみかみ（一例）の語があり、いずれも「大汝」と「少彦名」「少御神」が対をなしてうたわれている。『古事記』『日本書紀』『風土記』では、二神は基本的に別神として扱われているが、『万葉集』の四例が示す

ように、民間にあつては二神を一体のものとする  
 思考があつたのであろう。『万葉集』巻七の人麻呂  
 歌集所出の一二四七番歌には、(歌省略―村瀬注)と  
 あり、古来「妹背の山」の所在については、紀伊  
 とも吉野ともいわれるが、こうした歌が享受され  
 るなかで、大名持神社の信仰も展開してきたので  
 あろう。

菊地論文は当該歌を吉野と断定することには慎重で  
 あり、大名持神社を中心として展開する民俗、伝承、  
 歌の享受という柔軟な広がり相において捉えようと  
 している。

さて稲岡論文が、吉野に古くから妹山、そして背山  
 が存在したであろうと考えた、その有力な拠り所は、  
 古今集の次の歌の存在であった。本居宣長が『菅笠日  
 記』の中で「中におつる吉野川」と記したのもこの歌  
 である。

題しらず

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよ  
 しや世の中

(『古今和歌集』巻第十五、恋歌五、

八二八、よみ人しらず)

この古今集歌(以下、古今集当該歌と呼ぶ)には吉  
 野川と妹背の山とが詠み込まれている。稲岡論文はこ  
 の歌の存在を踏まえて

古今集以前、つまり万葉時代から吉野の妹背山は  
 存在していたとかがえられる

と述べている。つまりこの古今集当該歌が詠まれたの  
 は、それ以前に吉野に妹背の山が存在したからこそで  
 あると考えるのである。

しかしながら古今集に吉野の妹背山が詠まれている  
 ことをもって、万葉時代における吉野の妹背山の存在  
 を推し量ることには慎重でありたい。確かに古今集の  
 この「ながれては」の歌は、「よみ人しらず」の作で  
 あつて、古今集の時代をⅠ「よみ人しらずの時代」、  
 Ⅱ「六歌仙の時代」、Ⅲ「撰者の時代」のⅢ期に区分  
 した場合、Ⅰの「よみ人しらずの時代」は最も古い時  
 代に属する。しかし、古今集のよみ人しらずの時代と、  
 万葉集の柿本人麻呂の時代との間には、大きな径庭が  
 あると言わざるをえない。

次節で述べるように、平安朝以降、古今集が絶大な  
 影響力を有していたことから考えて、そしてあわせて、  
 平安朝期にはすでに万葉歌が訓めなくなっていた



ことから考えて、事はむしろ逆で、古今集当該歌が大  
名持神社の背後の山を妹山、そして吉野川を挟んでそ  
の対岸にある山を背山と呼ぶことへと導いたと考える  
のが自然ではないか。

### 三 古今和歌集の絶大な影響力

古今和歌集は平安朝以降の和歌は言うに及ばず、物  
語、随筆にも絶大な影響を与えた。歌人あるいは貴族  
等の知識人にとって、古今集一〇〇首をそらんじて  
いることが必要であるほど重要視されていたのである。

古今集当該歌「ながれては」の歌は「恋五」の部、  
しかもその最末尾に収められている。古今集恋の部は  
「恋一」～「恋五」の五部から成るのであるから、当  
該歌はまさに古今集の恋の世界を締めくくる、最重要  
な位置を占める歌である。しかも後世、古今伝授秘伝  
歌の一つとして、重要視され人々の間に広く深く浸透  
していった歌であった。そのようなわけで当該歌は以  
後の歌人・歌集にとりわけ大きな影響を与えた。試み  
に『新編国歌大観』の第一巻「勅撰集編」を繰ってみ  
るだけでも、きわめて多くの妹背の山の歌を見ること

ができる。しかもそのほとんどが古今集当該歌を何ら  
かのかたちで踏まえて詠んでいる。その歌々を少し列  
挙する。

ア はらからどちいかなることか侍りけん

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞ  
ありける

〔後撰和歌集〕卷第七、秋下、三八〇、よ

み人しらず

イ はらからのなかにいかなる事かありけん、つ

ねならぬさまに見え侍りければ

むつまじきいもせの山の中にさへへだつる雲のは  
れずもあるかな

〔後撰和歌集〕卷第十七、雑三、一二一四、

よみ人しらず

ウ 題しらず

むつまじきいもせの山としらねばやはつ秋ぎりの  
立ちへだつらん

〔拾遺和歌集〕卷第十七、雑秋、一〇九五、

よみ人しらず

エ 題しらず

いもせやまみねのあらしやさむからんころもかり

がねそらになくなり

〔『金葉和歌集』巻第三、秋部、二二二、春

宮大夫公実）

オ 堀河院に百首歌たてまつりける時、山歌

あさみどりかすみわたれるたえまより見れどもあ  
かぬいもせ山かな

〔『新勅撰和歌集』巻第十九、雑歌四、一三

三〇、権中納言国信）

カ 名所歌あまたよませ給うける中に、恋

あはでふるなみだのすゑやまさるらんいもせの山  
のなかのたきつせ

〔『続後撰和歌集』巻第十二、恋歌二、七六

三、土御門院御製）

キ 題しらず

おちたぎつよしのの川やいもせ山つらきが中の涙  
なるらん

〔『続拾遺和歌集』巻第十五、恋五、一〇九

三、正三位知家）

ク 題しらず

わが涙よしやよしのの河となれいもせの山のかげ  
やうつると

〔『続千載和歌集』巻第十二、恋歌二、一二

五五、津守国平）

ケ 名所恋といふことを

ながれてもうきせなみせそ芳野なる妹せの山の中  
河の水

〔『続拾遺和歌集』巻第十二、恋歌二、七九

六、従二位行家）

コ 延文二年後光厳院に百首歌たてまつりける

時、霞を

春といへばやがて霞のなかにおつるいもせの河も  
氷とくらし

〔『新後拾遺和歌集』巻第一、春歌上、四、

太政大臣）

一読して、これらの歌々が古今集当該歌の枠組みの  
中にあることは明らかである。妹山と背山の間に割つ  
て流れるのが吉野川であるという構図は歴然としてい  
る。

アトイは恋歌以外のものである。アトイは、夫婦な  
らざる兄弟の仲違いを詠む。二人を隔てるものは、吉  
野川ではないが、色変わり・雲が隔てると詠んで、当  
該歌が意識されている。ウは二人の間を秋ぎりが隔つ

と詠んで、当該歌の構図を踏襲する。エは当該歌の枠組みを持たない例外的な歌である。オについては別の視点から注目する（後述）。

カケは恋歌である。いずれも古今集当該歌の構図を踏まえていることは説明を要しない。さらにカとケは詞書きに「名所」と記されているように、当該歌の構図を有した妹背山が、名所として認定されるまでに広くもてはやされていたことがわかる。コは恋歌ではなく、春歌であるが、内容は当該歌の構図そのものである。

以上は勅撰和歌集に詠まれた妹背山のごく一部を取り上げたにすぎない。これを私家集等の歌々に広げて見ても大勢は同じである。

時代は大きく下って、江戸時代の明和八年（一七七）に初演された、浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』は、吉野川を挟んで、妹山に住む雛鳥と、背山に住む久我之助が、名家である両家の確執の犠牲となって、蘇我入鹿のお召しを契機に切腹・討ち首に処せられるという内容であるが、古今集当該歌の構図が基本にあることは言うまでもない。「山の段」の一部を抜粋してみよう。

・古への。神代の昔山跡やまあとの。国は都の始めにて。妹背の始め山々の。中を流るゝ吉野川。

・「今は中々思ひの種。いつそ隔て恋詫わびる。逢れぬ昔がましぞかし」と。切なる思ひかきくどき。歎けは俱ともに。娵こしもと共。「お道理でござります。ほんにひよんな色事で。隣同士の紀伊国大和。御領分のせり合やいで。お二人の親御様はすれすれ。雛鳥ひなどり様と久我がさま様の。妹背の中を引分る妹山背山。船も筏も御法度で。たつた此川一つ。つい渡られそふな物。小菊瀬踏して見やらぬか。」

・実げにもっとも尤嫁は大和智は紀伊国。妹背の山の中に落おっる。吉野の川の水盃。桜の林の大嶋臺。めでたふ祝言さしませふはい。

古今集当該歌の構図そのものと言えよう。

#### 四 万葉集の背山・妹山

前節では古今集の影響力の絶大さを述べた。とは言え古今集の影響は、その前の時代の歌集である万葉集には及ばないことは言うまでもない。しかし、こと（平安時代以降現代に至るまでの）万葉歌の理解、万

葉歌に詠み込まれた地名の特定等々には、古今集をはじめとする後世の歌集歌の影響が強く及んでいることも、一方でしつかりと心得ておかなければならない。

というのは、すでに平安時代には万葉集の歌が訓めなくなっていた。後撰集（天曆五年〔九五二〕）の撰者の梨壺の五人が、万葉集を訓み解く作業に従事しなければならなかったという事実は、そのことを如実に示している。訓めない万葉歌に詠み込まれた地名を特定しようとする時、古今集以降の後世の歌集歌を重要な拠り所として参照しようとするのは、これもまた自然の成り行きであったと言えよう。

村瀬前稿で詳述したように、万葉歌に詠まれた紀伊国の妹山が、紀の川の中には喜んで背山の対岸にあるいわゆる長者屋敷の岡がそれであると見られてきた（通説）のも、実は古今集当該歌の影響によるものであった。万葉集紀伊国の背山・妹山は、城山・鉢伏山の二峰から成る「背山」こそがそれであった。紀伊国の背山と妹山の間を紀の川が割って流れることはなかった。それにも関わらず、紀の川の対岸に妹山を求めたのは、古今集当該歌の構図（吉野川を中にして両山があるという構図）に縛られたためであった。

このような現象に接する時、吉野の妹山・背山は、万葉時代から存在したのではなく、古今集当該歌の影響下において、その存在が確立するようになったと考えるのが穏当であろう。しかし、古今集当該歌がいくら絶大な影響力を持つとはいえず、それ以前に何のゆかりもなかった山が、妹山と呼ばれるようになるとは思えない。

では古くから存在した大名持神社の背後の山が、妹山と呼ばれるようになるその由来はどこに求められるのであろうか。いくつかの想定が可能である。①第二節で紹介した桜井論文は、大名持神社の神域たる忌山が、転訛して妹山と呼ばれるようになったと推定した。

②大名持神（大己貴神）と言えは、『古事記』の八千矛神の沼河比売への妻問い譚（歌謡）、および適后・須勢理毘売命の嫉妬譚（歌謡）で広く知られるように、「妹」と結びつきやすかったため、大名持神社の背後の山が妹山と呼ばれるようになった。<sup>4</sup>③万葉集の当該歌（14の「大穴道少御神の作らしし」の歌）が影響して、後世、大名持神社の背後の山が妹山と呼ばれるようになった。万葉集の当該歌がどの程度広く知られていたかは不明ながら、第三節でみたオの歌（『新勅

撰和歌集』所出)の「見れどもあかぬ」などという表現は、万葉集当該歌の影響を思わせる。

本稿は③の見解が一番よいと考えるが、いずれも推測の域を出ないものではある。そしてこの妹山の存在が、古今集当該歌の構図と結びついて、吉野川の対岸にある、ちょうど一對として見ることもできる山容を持った山に、背山の名を冠したのではないか。背山およびその周辺には、妹山およびその周辺に見られたような神社・民俗・伝承は見られない。

吉野の場合は、はじめ妹山があり、それと対応上、対岸に背山が求められたのであろう。紀伊国の場合ははじめセノヤマ(背山)があり、それと対応上、対岸に妹山(通説。12頁に記したように、村瀬前稿は背山二峰説をとる)が求められたのであった。

なお付言すれば、これも村瀬前稿で述べたように、古今集当該歌はもちろん現地詠ではない。吉野川のほとりに立ってそれぞれ対岸に並ぶ両山を眺めながら歌ったといった類の歌ではない。机上詠と考えられる。この世の男女の仲に疲れ果てて諦めの境地に入った男女の心境を、万葉集の背山・妹山の歌を意識しつつ、しかも万葉の世界とは大きく異なっていて、妹山と背山の

間を割って激しく流れる「吉野の川」という風景を意図的効果的に創出しているのである。

この古今集当該歌の創出した風景が、後世、紀の川の中に挟んで背山の対岸にある山を、そして吉野川の中に挟んで妹山の対岸にある山を、それぞれ妹山(通説)、背山と定着させることになったのである。

## おわりに

以上の検討の結果、万葉集当該歌の「妹勢能山」が吉野の妹山・背山であると考え難い、当該歌も万葉集の他の一四首と同じく、紀伊国の背山・妹山を詠んだものであると考えるのが適切であるとの結論にいたった。

本稿での考察を通して、あらためて思うのは、古今集の影響力の絶大さである。そしてその一方で、それゆえにこそ万葉歌を解釈し、また万葉歌に詠み込まれた地名を特定する場合には、古今集以降の歌の解釈や地名の特定が、これまでの万葉歌の解釈や地名の特定に大きな影響を及ぼしている(時として万葉歌の解釈をゆがめ、地名の特定に色付けをしている)ことにも

十分に意を用いて、万葉歌に立ち向かわなければならぬということも実感した次第である。

なお本稿は、村瀬前稿の補足という側面も多いため、前稿ですでに述べたことにはあらためて触れなかった面も多い。併せてお読みいただきたく思う。

注

(1) 稲岡耕二著『萬葉表記論』(塙書房、一九七六年一月)、『万葉集の作品と方法』(岩波書店、一九八五年二月)、『入麻呂の表現世界』(岩波書店、一九九一年七月)等の重厚な研究がある。

(2) 大名持神社がこの地に置かれる以前は、三輪明神が分霊祭祀されていたとおぼしい。『大和志』に、「葛上郡」にある「大穴持神社」に関わる記事であるが、「大名持神社。在朝町村。称曰三輪明神。靈時唯有拜殿華表。而不設宮屋。以存故実也。」とあるからである。

また野本寛一「信仰景観論とはじめ―三輪山の力―」(『大美和』第一〇〇号、大神神社、二〇〇一年一月、112～114頁)は、三輪山の景観と三輪信仰の地方への定着について述べて、「神聖感に満ちて美しい三輪山の山容は、古来、日本人のここをひきつけてやまなかつた。古代人はそこに神を見たのである。三輪山を中核とし、三輪山を眺望できる一帯の空間を「信仰景観」と呼ぶことができるであろう。信仰の発生に際して、人びとは共同意的に、いわば民族的心性と

して心ひかれる「信仰景観」を選ぶのではあるまいか」と指摘したうえで「三輪山の景観を基点として地方において三輪信仰を定着させた例」として、「高草山」(静岡県の焼津市・静岡市・岡部町にまたがる標高五〇一・四メートルの山)を挙げている。吉野の大名持神社の背後の妹山は、形の整った円錐形の山容を有し、三輪山の山容に通じる。野本論文の「信仰景観」という視点から見ると、この妹山の景観がこの地に三輪信仰を定着させ、三輪明神(大物主神)を分祀させたのではないか。そして斉明朝の時代に、出雲の大名持神がこの地に勧請されたと考えられるのではないか。

(3) 『式内社調査報告』(第二卷、京・畿内2)(皇學館大學出版部、一九八二年二月、407～412頁)に、「(大名持神社は)中世に妹背神社と呼ばれてゐたことは『大神分身類社鈔』で知られる」とある。これによれば、中世には大名持神社の背後の山が、妹山ないしは妹背山と呼ばれていた可能性がある。

(4) 大名持神社の祭神は「大名持命御魂神・須勢理比咩命・少彦名命」(『式内社調査報告』(第二卷、京・畿内2))で、須勢理比咩命が祭神の一柱に数えられている。



吉野の妹山（左奥、吉野川の右岸）、背山（右手前、左岸）